

弘前城跡本丸 石垣発掘調査見学会

平成 30 年 11 月 4 日 (日)

弘前城本丸石垣解体工事は、平成 28 年度に開始してから3年目となり、今年で終了となります。現在、解体数 2,172 石で、解体予定数を終了しています(11 月 4 日時点)。天守台下と東面北側は 16 段目の濠の水際ラインまで解体しています。

解体工事も佳境に入り、昨年度に加えて新しい成果が確認されています。

昨年度の発掘調査報告会で報告した、慶長 16 年(1611)の築城の際には築き掛けであった本丸東側石垣の北端の出隅と推定される部分(算木積みの可能性)の石積みは、根石と背面の盛土状況を確認しました(写真①-1、①-2)。この石積みは、慶長期の出隅跡か、元禄期に築き足しする際に、裏込め石が崩れないように積まれた押え石かはまだ調査中です。

井戸遺構(写真②-1、②-2)はさらに調査が進み、井戸の北・西壁を押える板材、東壁の裏込め石を押える 11 段の石積み、また中央の井戸からは二重の木枠も確認されました。いずれも元禄期の構築と考えられます。

排水遺構(写真③-1、③-2)は、下段部分が元禄期に構築されたもので、上段部分が 19 世紀代に改修されている可能性があることがわかりました。現在、築石の解体に合わせて解体中で、床石とその下面の状況が明らかとなりました。

また、天守台の下から北に約 40m 伸びる間知石列を確認しました(写真④-1、④-2)。同規格の石が斜めに最大 11 段積みされているのが確認されました。近代の修理範囲内に収まることや、盛土や裏込め石などの構造から近代の工事と推定されています。近代背面盛土を押える機能を果たしたと推測されます。

間知石の分布とほぼ重なる範囲で、根石の一つ上の築石の面側には帯コンクリートが敷設されているのが確認されており(写真⑥)、さらに面だけでなく胴部にコンクリートが敷設されているのも確認されました。胴部のコンクリートもほぼ間知石の分布範囲と重なります。どちらのコンクリートも根石の一つ上の築石を広く固定する役割で、大正4年の修理の際に石垣基礎としたと考えられます。



①-1 出隅(南から)



①-2 出隅根石(南から)



②-1 井戸遺構板材(東から)



②-2 井戸遺構全景(南から)



③-1 排水遺構(東から)



③-2 排水遺構(西から)



⑦ Eトレンチ(南から)



⑥ 帯コンクリート(北から)



⑤ Dトレンチ(北から)



④-1 間知石根石(北から)



④-2 間知石北端(南から)

慶長 15~16年
(1610~1611)
築城

元禄 7~12年
(1694~1699)
石垣築足

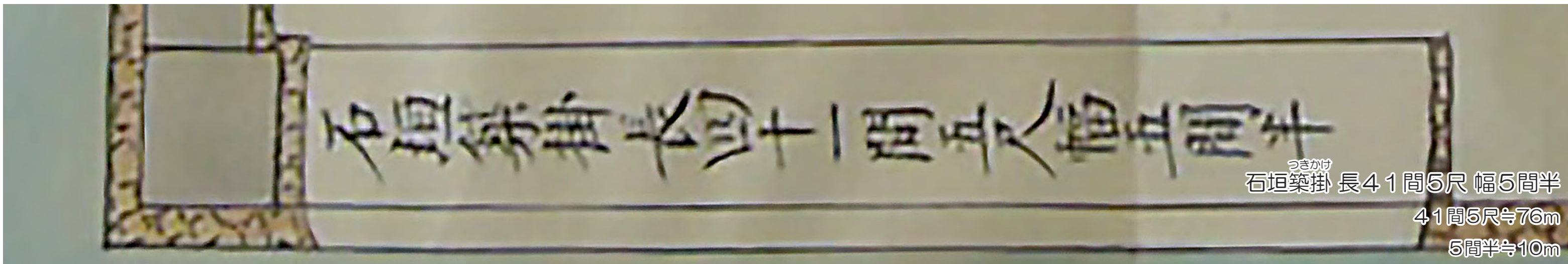
文化 6~7年
(1809~1810)
現天守台普請

明治 27年 (1894)
天守台石垣崩落

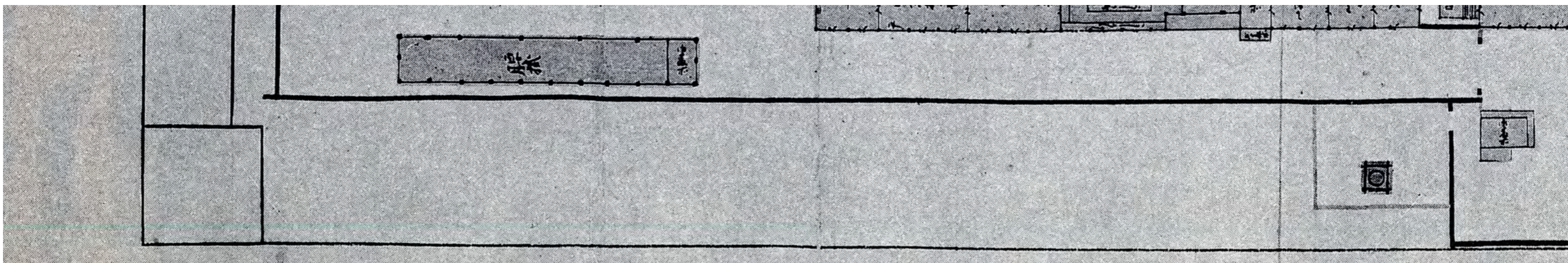
明治 29年 (1896)
天守台石垣崩落

大正 4年 (1915)
修理

1600年	為信	信枚	信義	信政	信寿	信著	信寧	信明	寧親	信順	順承	承昭	1900年																									
文禄	慶長	元和	寛永	正保	慶安	承应	明暦	万治	寛文	延宝	天和	貞享	元禄	宝永	正徳	享保	元文	寛保	延享	寛延	宝暦	明和	安永	天明	寛政	享和	文化	文政	天保	弘化	嘉永	安政	文久	元治	慶応	明治	大正	昭和
	徳川家康	徳川秀忠	徳川家光				徳川家綱			徳川綱吉	徳川家宣	徳川家継		徳川吉宗			徳川家重			徳川家治						徳川家斉			徳川家慶	徳川家定	徳川家茂	徳川慶喜						



弘前御本城ノ図 (2 / 3) 奥州津軽郡弘前本城之圖 元禄 7年 (1694) 一部拡大



御本城御差図 寛文 13年 (1673) 一部拡大

